もっと知りたい 武者小路実篤

小説③「馬鹿一」

そうです。「馬鹿一」が私の通り名です。下山一という、れっきとした名前があるのに、たいていの人が「馬鹿一」って呼ぶのです。よっぽど愚かな人間と思われているのでしょう…。

でもね、私はいっこうに平気ですよ。だって、あの武者小路実篤先生が、「馬鹿一」は自分の分身の一人だって、そう、おっしゃるのですから。

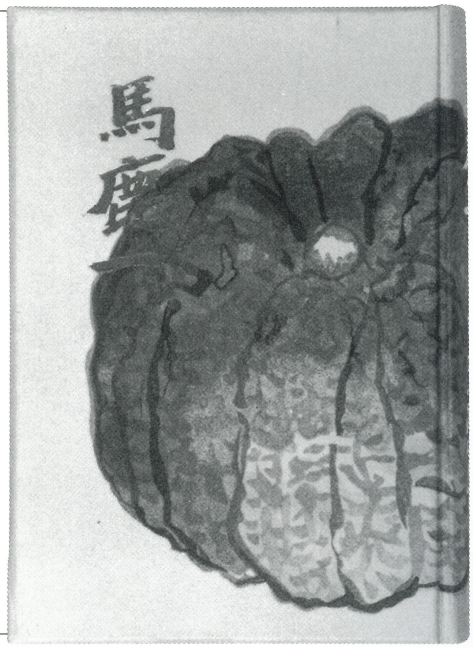
一 『山谷もの』の誕生

第二次世界大戦が終わった昭和二十年、実篤は六十歳になっていました。

敗戦後のすさんだ世相が続いていた昭和二十三年夏、実篤は思いを一つにする人々に呼びかけて、その名も『心』という雑誌を創刊しました。

ちょうどその頃から、いわゆる『山谷もの』と呼ばれる作品群も生み出されて行きます。山谷五兵衛という話好きなおっちょこちょいで、それでいて妙に深い感性を持った、変わった男がいて、これも作中人物である〝作家〟を訪ねて話をする、その話を作家が紹介する。

そんなスタイルの小説や戯曲なので、『山谷もの』と呼ばれるようになりました。この『山谷もの』は、昭和四十四年夏までの二十一年間に「真理先生」のような長編小説も含めて、六十八篇にも及びました。



『馬鹿一』初版本（昭和28年　河出書房）
短編小説「馬鹿一」のほか〝山谷もの〟18編を収める。
装幀は実篤。

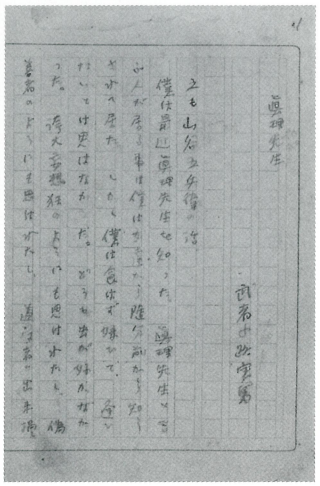
二 『山谷もの』の主役たち

『山谷もの』には、たくさんの人が登場しますが、主だった人物は〝馬鹿一〟〝真理先生〟〝白雲〟〝泰山〟の四人です。真理先生は多くの弟子を持ち、人の道を説く老思想家。白雲は初老の名高い画家。泰山はその弟で世に知られ始めた書家です。それぞれに芸術や人生について優れた見識をそなえた人物です。ところが〝馬鹿一〟だけは無名なばかりか、彼の描く野の草や路傍の石の絵は、周囲の者から何の値打ちもないものと見下げられているのでした。

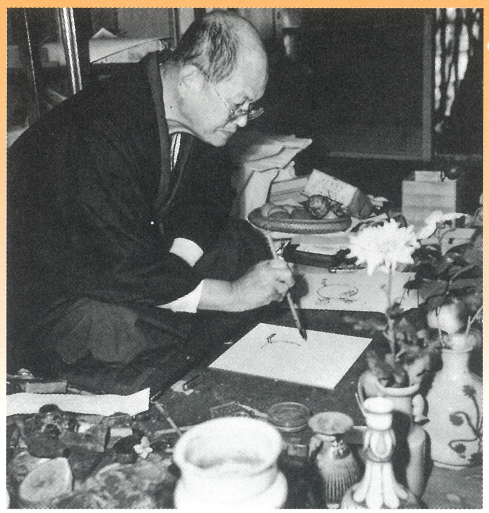
四人は、『山谷もの』の小説や戯曲の随所に登場し、説得力を持ってその人柄や考えを読者に示します。

実篤は、小説「真理先生」の後書きの中で、次のように述べています。

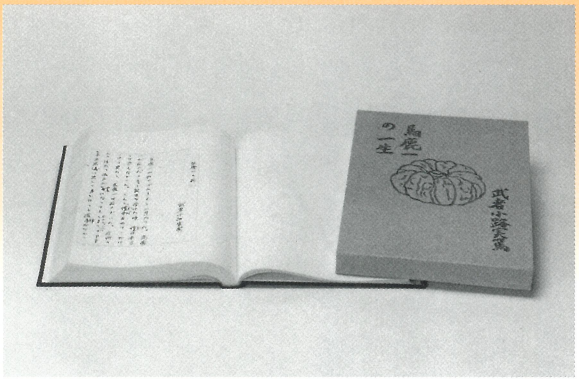
「出てくる人物にモデルはない。…四人とも僕の分身で、僕をいくらか純にし、誇張した処がある。」　（河出文庫 昭和二十九年）



「真理先生」原稿（冒頭）　個人蔵
“山谷もの”の登場人物の一人、“真理先生”を主人公とした長編小説。
『心』昭和24年１月号～昭和25年12月号に連載。



描くものをしっかりと見て、一心に筆をとる実篤　昭和27年



『馬鹿一の一生』初版本（昭和39年　警醒社書店）
「馬鹿一の死」の題名で『心』昭和34年9月号～昭和35年4月号に連載、初版本出版の際に改題。活字でなく、実篤の自筆原稿をそのまま印刷した珍しい本。

三　人間「馬鹿一」の真髄

さて、雑誌『心』の昭和二十三年十一月号に、『山谷もの』の第五作目として掲載されたのが小説「馬鹿一」です。

馬鹿一の仕事は少しも世間から認められませんが、彼は卑屈にもならず、千年の後にでも、自分の真の価値が理解されれば満足だ、などと言っています。まわりのおせっかいな連中が、なんとか馬鹿一に自分の愚かさを思い知らせようと、入れ替わり立ち替わり出かけて行って議論を吹きかけます。

しかし、一人として目的を達する者はいません。

馬鹿一は、理屈で相手を言い負かしたりしたのではありません。

自然の奥深い美しさを見抜き、自然の意志を実感し、一生懸命仕事する、そういう日々を感謝しながら生きている馬鹿一の、純粋で無欲な人柄に、まわりの俗物たちが負けてしまうのでした。軽蔑されている馬鹿一が、実は誰よりも尊い心の持ち主だったのです。

四　馬鹿一と千家元麿

六十八篇も続いた『山谷もの』の最後の作品は、昭和四十四年八月の雑誌『心』に載った『泰山「馬鹿一」の三回忌に語る』です。長い間、馬鹿一は実篤の中に生き続けました。

なお、小説「真理先生」の後書きで、実篤は「馬鹿一のある点は千家元麿の一面がいくらか入ってゐるかと思ふが、大体僕の理想の一面の代表者である。」と述べています。

千家元麿は、自然賛美の素朴な作風で知られた詩人です。若い時から実篤を尊敬し、実篤もまた元麿の魂を愛していました。この詩人が清貧の内に世を去ったのは、雑誌『心』が出る四ケ月前（昭和二十三年三月）のことでした。創刊号の〝余録〟欄に実篤は「千家元麿に死なれたのは残念だつた。この雑誌が出ることを一番喜んでくれたらうと思ふだけなほ残念だ。」と書き記しています。

馬鈴薯と玉葱　千家元麿
詩人・千家元麿は、絵を描くのも大好きで、描きはじめると我を忘れるようなところがあった。

発行日／平成14年7月27日初版　平成17年7月23日再版　発行／調布市武者小路実篤記念館　〒182-0003 東京都調布市若葉町1-8-30　TEL.03-3326-0648
企画・編集／調布市武者小路実篤記念館運営事業団　資料撮影／川崎 茂　レイアウト／デザイン室 あとりえ
古紙配合率40%再生紙を使用しています